

クストカメラにおけるアイヌのコレクションについて

A. SOKOLOV

クストカメラに大きいアイヌの民俗学的資料が所蔵されています。コレクションは全部で25、総点数は1890点です。これらのものはいろいろなみちで、いろいろな時代に博物館にもたらされました。荻原眞子（千葉大学）によれば、クストカメラのアイヌ民族資料の特徴は収集地が千島、サハリン、北海道にわたっているということです。全体としてはサハリンの資料が大部分を占めていますが、いちばん古いのは千島からのコレクションです。

千島列島

千島列島については最初の資料が1826年の海軍省から譲渡されたのもので（No. 810）。1826年と言うのは収蔵年ですが、現地での入手はそれより以前です。このコレクションは四点しかありません（衣服・キセル・矢筒です）。

それよりも以前の資料は、18世紀の初めに収蔵された、台帳に記録されている“クストカメラより”資料です（No. 820）。ピョートル大帝の“クストカメラ”から移されたものです。採集地は千島と記されています。ロシア極東の先駆者によって千島に取り集められた物だと推定しえます。1747年にクストカメラは火事で壊れてしまいましたが収蔵品は大部分がなくなりました。のこった物は説明なしになりました。その物の中に衣服・ナイフのさや・箱などがあります。

そして、千島アイヌの資料は I.G. Voznesenskii が調査航海1839年に収集したもの（No. 809）もあります。I.G. Voznesenskii はカムチャトカと千島列島へ行って、千島アイヌのところで資料を集めました。収集は数の多くて全部で22点になります。コレクションは狩具（弓・矢・矢筒）、船のモデル、器、フクロなどを含めています。歴史学博士 Ch.M. Taksami の意見によってその中に一番貴重なものは現在では見られなくなった伝統的な海洋船の模型です。

サハリン

18世紀のなかばからクストカメラにおもにサハリンからのコレクションが入れるようになりました。サハリンの資料は大部分が8人のコレクターとロシア地理学協会によって集められたものです。1859年にロシア地理学協会を通じてクストカメラに東部シベリアの研究者 R.K. Maak から資料が移されました。全部で4点になります。1888年にアムール河流域とサハリンの諸民族を研究した L.I. Shrenk によってニブフとヤクートとアイヌの13点をもたらされました。1890年に P.I. Suprunenko は150点を博物館に寄贈されました。アイヌ関係のものとしては櫓につけた犬の一组が面白いです。そしてさまざまなものはロシア地理学協会と軍医大学解剖学博物館と K.N. Poshiet と L.Y. Shternberg から移されました。それよりもっと大きいものは B.O. Pilsudskii のコレクションです。全部で約850点になります。

B.O. Pilsudskii のコレクションの収集地はサハリンと北海道です。サハリンからの資料がサハリンの各地で集められ、アイヌの民族文化の特質を明らかにしました。荻原眞子によると、これがコレクションの特徴の一つということです。台帳には、東海岸・西海岸やマウコ・セトロ・ニイトイ・シロハマなど地名が記されてい

ま。資料は日常の物から儀礼や信仰までアイヌ生活のさまざまな領域に渡っています。たとえば、営業では狩猟・漁猟・農耕・採集関係の道具とそれを作るための素材や道具があります。衣服については、樹皮や植物繊維の着物、毛皮の衣服、帽子、手袋、靴などを見られます。

資料にアイヌ語が記されています。アイヌ語の記載は全体で約600点になります。サハリンアイヌ語にとって貴重な素材です。

その外に、B.O. Pilsudskii は非常にたくさんの写真を残して、その写真資料にも地名が明記されています。

もう一人の大学者は I.S. Polyakov です。19世紀の末 I.S. Polyakov はサハリンを訪れて、タライカ、コルサコフなどのあたりで民俗学・考古学の資料を取り集めました。古代の石器・土器とアイヌ時代の物が発見されました（器、キセル、イクニシ、中国製のビーズなどです）。その中に日本製の物もありました。アイヌ貿易に示している資料です。1882年に I.S. Polyakov は8ヵ月ほど日本に滞在しました。日本で植物を研究したり、角製と骨製ものを集めたりしました。Josselin フランス領事から写真帖を贈り物として受けました。

最も新しい資料は、1947年に M.G. Levin と I.P. Lavrov が南サハリンで収集したコレクションです (No. 4974)。特に、ニイトイ・シロハマ・ライチシでアイヌの墓を調査して、狩具・飾り・器・儀式道具を発掘しました。

北海道

北海道アイヌの調査についても簡単に話さなければなりません。北海道からの資料は明治時代後のものです。

コレクション No. 839 は1903年に B.O. Pilsudskii と W. Sieroszewski と共に北海道で収集した資料です。北海道には研究者が白老・サル・ピラトリを訪れて、民俗学的資料、民族物語と写真を集めました。

1904年に、博物館にロシア地理学協会の A.V. Grigoriev から29点が寄贈されました (No. 811)。1879年には A.V. Grigoriev が乗った探検の船が日本の近くで海難にあって、A.V. Grigoriev は一年間北海道に住むことになりました。北海道の自然・アイヌ生活と物質文化の特徴を研究していいコレクションを集めました（仕掛け弓、白樺皮からつくった矢ずつ、イクニシ、マキリなどです）。6枚のアイヌ絵を持ってきました。今“熊祭り”と言う巴江山人（はこうさんじん）の絵が展示されています。そして面白いのはノルデンシエリドで描いた入墨女性の手のスケッチです。もう一つ A.V. Grigoriev のコレクションはアイヌのものが32点があります (No. 345)。A.V. Grigorievのコレクションは北海道のアイヌ生活文化の姿をずいぶん反映しているものです。